

# シニア・ホーム

赤谷慶子

父一九八七年七十歳を目前にして他界したりき。その二年後、それまでの獨身貴族封印し母と暮らし始めたり。吾は比較的健康にて猛烈なる仕事人間の路をひた走り續けて來たり。昨年五月に胆嚢摘出手術したりし後、退院して歸宅するに、デイケアに行きたるはずの母、自宅にて倒れてあるを見出したり。日中なりし事もあり、ケアマネジャーやヘルパー駆けつけ病院に搬送し事なきを得たり。然しながら、この事態によりて、これまで構築してきたりし母の生活システム今後機能せぬ可能性ありといふ危機に瀕するを露呈するに至れり。これは所謂老老介護の世界なり。

吾は現在も仕事に従事したれば、我が置かれし年齢の状態自ら理解するなかりしとの認識と、己も父を超える年齢になりたりといふ事實と、そして九四歳の母を今後とも見届けらるる餘裕ありやとの懸念に自信喪失す。

選擇肢はひとつ。シニア・ホームを探し始めき。色々なる人たちより話も聞き、公的なるものは待ち人多く入所すること難からんと、最初より除外しき。購入、若しくは賃貸、そして介護提供せらるる等色々なる種類あり。母の妹は數年前月島にある都市銀行關聯の高級老人ホームに既に入所したれど、百五十人もの大所帯にて重度の認知症より健常者まで階數によりて分けたるホームなり。従ひて小規模のものに比し行き届かぬ事多しと聞く。母は痴呆もなく、健常なれば部屋の權利購入し、食事付にて必要に應じ介助依頼し得るものを入手せむとその邊りを調べき。ベネッセは先人なれば、ノウハウしつかり蓄積され、多くのホーム都内に持ちたり。櫻新町に新築せられしホームは五十人程度と人數も適當にて、最良かと思へど、未だ時間に餘裕ありと他も當たりたりき。知人そのホームへ自分の母親入所させ、部屋數残り少なくなりたる事を教へてくれしかば、まどひて手付金打ちき。母と話し合ひき。母は自分の健康状態良く理解しており、ホームに入るは自分の安心のためもあり、これ以上娘に面倒をかくるを好まざるによりて、良き所あらば入らまほしと思ひき。實は母の痴呆進みて後に入所せしむれば、友達を作るにも難澁するらんと考へたりしかば、タイミングを失せざりしは幸ひなりと胸を撫でおろせり。

娘は正月終はりし頃よりと思ひたれども、母は寒き時に引越するより十二月中旬頃に入らん。さすれば、ホーム建ちてより初めての正月を新しき環境にて新しき友人たちと同じ氣持にて迎ふるを得んと申す。なるほど、いと合理的なりと思ひき。妹夫婦もドイツより歸國し、ホーム訪れ、ドイツにあるものより綺麗にて行き届きたりと喜びてあり。

引越しの日、母より「よき所を見つけてくれて本當にありがたう」と言はれ、驚きと共に、尊敬の念湧きし。常に冷靜にて、感情表に出さぬ合理的なる母をずっと見て來たれど、武士のごとき人なりと思ひき。それ故あの華やかにて型破りなる父をよく支へたる所以なりしやとも思ひき。

自分は團塊の世代なれば、母の年齢まで長生きするは難かるべし、ホームも満員の所多く、入所する  
餘地等なからむと考へたり。所謂P P K (ピンピンコロリ) 理想なるが、いかなる結末にならんや、測  
りがたし。

(平成二十九年十月二十九日受附)